# たんこぶ二つ

中田てる子

昭和五十九年であっただろうか？　はじめての夏期学校の学びを終えて、我が家へと急いだ。「ただ今帰りました」と言ったとたん、奥からつかつかと出て来た夫が仁王立ちで、「鞄を持って外へ出ろ」と叫んだ。行きより帰りの方がはるかに重くなっている鞄を持って、私は外へ出る。「下へ置くなバカヤロー、俺様をバカにしやがって。二泊三日飲めや歌えの大騒ぎをして、いけしゃあしゃあと帰って来たなあ」と両手で私の頭をボンボンなぐりつけて来た。鞄を持ったままなので、手の自由がきかず叩かれていた。家の外は大通り。市バス、大型車、タクシー等が頻繁に通る所である。たちまち物見高い人達が遠巻きに見ている。行き交う人も何事か？と……。

そんな中、夫は私の頭を叩きながら、得意顔で悪口雑言を並べ立てる。その時私はじっと夫の目を見ていた。

やがて叩く、どなるに疲れた彼は、「おい、ぼけなす腹がへった早く飯にしろ！」と言って中に入った。

近所の口さが無い人達は口々に「バカ嫁」と後指して、三三五五引き上げて行った。
私の頭には、左右一つずつの、ビー玉ぐらいのコブができた。近所の人達の白眼視は当分続いた。それから幾日か経ったある日、あらたまってと言うか、やや照れくさそうに「お前はあの時、輝いていたよ！　よほど夏期学校と言う所は、素晴らしい所にちがいない。これからは毎年行ってこいよ！」とあの夫が言った。その場に立って一部始終をみておられた主が執りなして下さったのである。
夫の残してくれたタンコブ二つ。気がつくと大切にさすっている。あれから約二十年、私は毎年夏期学校に出席できている。時折、頭痛を覚える事がある。あの日の事がなつかしく思い出されてくる。おこりんぼで淋しがり屋だった夫を導く事ができなかったことは、残念だが。